

食卓を囲んで夕食をとる4人は、見た目には普通の家族だ。主に和志と紗英がおしゃべりをしている。景子と玲子は強ばった微笑みを無理矢理つくりながらうなずいていた。話しかけられると、かすれ気味の声で答えている。バイブがテーブルの下でずっと二人を騷っていた。それを知っている和志と紗英は、二人の苦悩と快樂の狭間に漂う、切なさの滲む表情を眺めながら、楽しんでいる。

「変な音が聞こえない？」

そんなとき、和志が唐突にそう言った。

景子は、和志が自分を二人の娘の前で、さらに騷るつもりだと思った。バイブを挿入させ、それを動かしながら、わざと「変な音がする」と言って騷ってくるのだ。表情がさらにこわ

ばる。かすかにブーンと鳴るモーター音が娘たちに聞こえているのではないかという怯えが挿入されてから常にあった。和志はそれをととう口にしたのだ。モーター音が大きくなってきたような感覚に、景子の怯えは強くなる一方だ。顔を上げることができなくなった。一方、玲子は義妹に挿入されたバイブの存在を母と和志に気づかれたのではないかという恐怖にとらわれていた。玲子にとっても、自分の股間から発せられているくぐもったモーター音を母と弟に気づかれはしないかとびくびくしていた。和志の言葉は、玲子の胸をどきりとさせ、動悸を激しくさせる。

「そうかしら？…玲子姉さん、そんな音、聞こえる？」

紗英が玲子を見る。玲子はこわばった顔で、

「いいえ、聞こえないわ」

とすかさず言った。声がすっかりかすれている。紗英は隣に座っている玲子の顔をまじまじと見た。美しいと思った。抜けるような白い肌とつぶらな瞳、形のよい鼻梁の清楚な顔立ちだ。美しさが自然と滲んでいる。母親の景子も美しい女性であった。大学生の娘をもつ母親とは到底思えない若々しさだ。顔立ちもそうだが、みずみずしい肢体を持った同性から見ても魅力的な女性だ。

「そうかな？ママは聞こえるでしょ？ブーンって唸っている音が聞こえるよね。まるで蜂の羽音みたいな音だよ。」

和志が隣に座る景子に顔を向ける。和志の左

手は、テーブルの下で景子のスカートの中に入っている。パンティの上から、くねっているバイブの柄をつかんで騷っているのだ。景子が下を向いて必死に耐えている姿がおかしくて仕方がない。向かい側に座る玲子も下を向いている。隣の紗英の腕がテーブルの下に潜り込んでいる。和志と同じように義姉の股間を騷っているのだ。

「ねえ、義母さん、ぼくの話、聞いているの？いつもの義母さんじゃないみたいだよ。どうしたの？心ここにあらずって感じだよ。」

和志がぐいっとバイブをねじ込んできた。子宮口までもえぐられるようなバイブの動きだ。

「あうっ…そ、そうかしら…」

景子はそう言ってまた視線をテーブルに落と

した。

「義母さん、顔が赤いよ。やっぱり今日はおかしいよ。体調が悪いんじゃないの。心配だな。」

景子の顔は確かに紅葉色に染まっている。羞恥とバイブによる刺激によって顔は上気しているのだ。

「和志は、ママのこと大好きだもんね。きれいなお母さんが出来たって、はじめからすごく喜んでいたもんね。大好きなママが調子悪いんじゃないあ、心配だよ。ママ、風邪でもひいたんじゃないの？熱があるみたいだよ」

向かい側に座っている紗英は、今にも笑いが噴き出しそうなのをこらえながら、真顔になって言う。和志の指がバイブの柄をパンティ

の上から握って、出し入れし始めた。景子は声が漏れ出そうになっており、思わず口に手を当ててしまう。指を口に押し当て噛むことで、ようやく悦楽の喘ぎを止めたのだ。

「ママ、どうしたのよ…気分悪いの？」

紗英がさらに真顔で聞いてくる。景子はうなずいて、すっと席を立った。急いでスカートの裾の乱れを直した。もう堪えられなかった。このままでは、和志に股間を舐られていることを娘達に気づかれてしまいそうだ。暗く哀しい秘密を知られてしまいそうな恐怖から、席を外すことを選んだのだ。あとで、和志にお仕置きをされることは覚悟していた。和志も席を立って、景子の臀部に手を回すとぐいっと抱き寄せてきた。腰を抱きかかえて義母

のおでこに手をあてがった。

「義母さん、だいじょうぶ？熱もあるみたいだよ…しばらく横になった方がいいよ」

そう言って臀部をスカートの上から押すようにしてリビングから出て行く。